

No.88 フェリックス・ゴンザレス＝トレス —無題—

Felix Gonzalez-Torres

北川フラムさんのコラム / 1998 (平成 10) 年 6 月 15 日付 立川市市報記事より

フェリックス・ゴンザレス＝トレスはキューバ生まれで、ニューヨークで仕事をしている 1996 年、39 歳で亡くなった。彼の仕事の評価は高く、亡くなる一年前にグッゲンハイム美術館で回顧展がひらかれた。

ここファーレ立川では、ビルの壁についている非常階段に大きな写真一枚のビルボードを取り付けた。灰色の空にわずかに一羽、鳥が飛んでいるというものだ。

猥雑な空間にある看板なのだが、通りを歩いて見上げれば、その静かな光景に魅きつけられて、私自身の心が静寂の中に入っていくことを知るのだ。都市の中で静寂から、永遠の時間を感じてしまう。

このプロジェクトの時、「日本には行けないな」とトレスは言っていた。彼はその時、その命の短いことを知っていて、この作品を作ったのだ。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現 : UR 都市機構) 「ミニ通信」より

私の作品の本質は、刷り直し可能な紙や、代替のきくキャンディー、取り換え可能電球や、再刷可能な看板など、傷つきやすい素材や形態を使うことにより、多様性とはなにかを問うことで鍛えられるものです。

一つのオブジェを考える場合、どんな作品においてもまず私は、それを所有するのが誰かを特定しようとしています。所有者/守護者/コレクターは、作品が私の手を離れた時点で、その永続性に対し責任を負う唯一の人であるという重要な役割を演じます。

私は、固定化とモニュメント化を志向する一般的傾向を混乱させることに興味をもっています。例えば作品が永遠に流動的であったとしても、所有の責任が生じることで、作品の長寿あるいは不死の可能性が用意されるのです。不死とは、不安定と変化を具現するものです。

また私は、いかに所有が公的領域と私的領域を真に隔てることに他ならないかを明らかにする視覚的構造をつくりだしたいと思っています。特に、作品の唯一性の曖昧さを強調することに関心があります。作品の唯一性とは、素材によって認められ、作品の意図と調和していることを前提とします。

“真性さの証明”について最近言われているように、作品のコピーが、一度に一か所以上の場所で展示されるという考えに私は大いなる喜びを見いだす者です。作品を展示しようとする機関は、貸出契約の基準を守るならば、所有者から同意を得ることができるでしょう。